対話の場の限界と非常事態の生みだすもの
―― アイルランドにおける農民とウォーカーの環境認識から ――

北　島　義　和

1　問題の設定

近代以降の先進国社会では、観光や余暇のために都市住民を中心とした公衆が農村地域を訪れる機会が増加していった（Corbin 1995=2000）。だが、この変化は農村における様々な資源のコントロールをめぐって、多様な利害関係者の間でしばしば対立を引き起こしてきた。そのひとつが、レクリエーションを目的に農地に入ってくる人々と、その土地の所有者（主に農民）の間に生じる軋轢である。この対立は「農村アクセス問題」などと呼ばれ、現代でも特に私的所有制を基盤とした西洋社会においてしばしば見られる（Jenkins and Prin 1998）。私的所有制のもとでは、土地を法的に所有する権利者がそこへの侵入者を何らかの手段で排除することは基本的に合法である。そのため、上記の軋轢が先鋭化した場合には、それまで公衆がアクセスしてきた農地が所有者の農民によってブロックされる事態も少なからず生じ、西洋諸国ではこのようなアクセスをめぐる対立はしばしば社会問題として議論されてきた。つまり農村アクセス問題とは、農村における土地という自然資源をめぐって、「仕事」と「レクリエーション」という相異なる観点から認識および働きかけをおこなう人々の間に生じる対立である。

そのような物理的環境をめぐる人々の認識や経験に対しては、これまで主に人文地理学領域における「場所（place）」あるいは「場所感覚（sense of place）」についての議論によって考察がおこなわれてきた[(1)]。この議論は、1970年代にそれまでの地理学が物理的環境を均質・均等な「空間（space）」として捉えてきたことを批判し、個々の環境をめぐる人々の具体的な経験や意味付与に注目する立場として登場したものである。そこでは、例えばY. Tuanは、「トポフィリア」という言葉によって親密で直接的な経験を通した個別の物理的環境への愛着について論じた（Tuan 1974=1992）。あるいはE. Relphは、人々の文化的・

(1) このような「場所」をめぐる地理学の研究史のまとめとしては、荒山ら（1998）が参考になる。

相互主観的な「生きられた空間」を重視し、現代社会においてそのような「場所」が抹消されていく動きを「没場所性」と呼んで批判した（Relph 1976=1991）。

ただ、このような主に現象学的観点からのアプローチに対しては、「場所」を生みだす基盤としての共同体を理想化・本質化するとともに、その内外に存在する権力関係を無視しているとの批判がなされた。これを受けて 1990 年代頃からは、権力関係も視野に入れつつ、「場所」を動的なアクターによって継続的に構築されていく社会過程として捉える立場が主流となり、隣接の学問領域も巻き込みつつ議論が展開されている[(2)]。例えば、歴史地理学者の K. Olwig は、視角を中心とした抽象的・包括的な表象としての「景観」の歴史と対比しつつ、「ボディ・ポリティック[(3)]」を通じて具体的・集合的に構築されていく「景観」の歴史を描いている（Olwig 2002）。あるいは、人類学者の T. Ingold による、「居住（dwelling）」を通じて生成される「タスク・スケイプ」を重視する立場もこの流れに含まれるだろう（Ingold 2000）。Ingold は、不断に移動する線的なイメージでこの「居住」を捉えており、それを実践する「居住者」は、特定の場所に閉じ込められた「地元民」とは異なる存在であるとしている（Ingold 2007=2014）。また、アフォーダンスやアクターネットワーク理論を背景にした身体の社会学的研究も、人間と自然環境や物の境界線を無化することによって、それらのアクターが互いを生成し合う過程に注目し、同時にそこにおける従属や抵抗のありようについても論じている。そしてそこでは、各アクターの結びつきのありようによって、互いに異なる複数の「自然」（すなわちある種の「場所」）が生まれてくることになる（MacNaghten and Urry 2000）。

そして、これらの研究動向を背景として、次節以降に本稿で分析の対象とする牧畜農民や山歩き愛好家（以下ウォーカー）に関しても、彼らの有する環境認識のありようについて様々な分析がなされてきた（Edensor 2000; Gooch 2008; Gray 1999; Lorimer and Lund 2003; Michael 2000）。なかでも J. Vergunst は、農民とウォーカーの双方についてフィールドワークに基づく実証的な観点からの分析をおこなっている（Lee 2007; Vergunst 2012; Vergunst 2013）。そこにおいて Vergunst は、行政や環境団体の抽象的な環境言説と対比させつつ、農民とウォーカーの環境をめぐる実践を、共に現場に根ざした同種のものとして論じており、両者を別種のものと捉える J. Urry のような立場（Urry 2000=2006）とは距離を取る点で特徴的である（Vergunst and Árnason 2012）。

---

(2) 日本の社会学領域においても、例えば堀川三郎や吉原直樹がこのような観点から「場所」をめぐる研究をおこなっている（堀川 2010; 吉原 2008）。

(3)「ボディ・ポリティック」とは、政治共同体の身体的メタファーである。Olwig の議論においてこの語は、人々を管理する装置としての側面よりも、その領域を不断に再構築する「景観」の作り手としての側面が強調されている。

だが他方で、農村アクセス問題のように、環境に対する認識や働きかけを異にする現場の人々同士が対立する場合に、それらをいかに擦り合わせ、共存させることが可能であるのかという点については、上述の先行研究は必ずしも明らかにしてこなかった。このような問いについて実証的かつ理論的に応えているのが、福永真弓である（福永 2010）。福永はアメリカ合衆国のマトール川流域をフィールドにした研究において、流域協議会やアジェンダ・コミッティといった〈応答と関係の場〉における身体的な協働を通じて、それまで対立していた新住民とランチャーが共通の正統性を生みだしていく過程について分析している。この福永の論考は、単に「場所」をめぐる複数性の確保を主張するだけではなく、互いに環境認識を異にする人々が現場で共に作り上げていく新たな「場所」の具体的なありようにまで踏み込んで考察している点で優れている。

ただ、このような福永の議論にもいくつかの空白地帯があることは否めない。例えば、福永の論考では〈応答と関係の場〉がマトール川流域という物理的空間に重なるものとされ、そこに住まう人々の間の対話のありように分析の中心が置かれている。そのため、そのような対話には参与してこない外部アクターが有している影響力については、ほとんど評価がなされていない。また、このような多様な主体による対話の場は、常にうまく機能するとは限らない[(4)]。だが、そのように対話の場が機能不全に陥っている場合に、人々の環境認識を擦り合わせるような契機が他に存在するのかという点についても、明らかにはされていない。

以上を踏まえて本稿では、公衆の山歩きをめぐる農村アクセス問題が深刻化しているアイルランドを事例として取り上げ、そこで対立関係にあるウォーカーと農民の環境認識のありようについて分析する。そしてその中で、両者の間の対話の試みに対して外部アクターが及ぼす影響力と、そのような対話の場とは違ったところで生じてくる、両者の環境認識の擦り合わせの契機について考察をおこないたい。

本稿が対象とするのは、アイルランド北西部のとある丘陵地帯である。この丘陵地帯は二つの県（カウンティ）にまたがる広大なもので、そのほとんどは近隣の諸集落に住む農民たちの所有するいくつもの私有地および共有地から成り、主に羊の放牧地として使われている。この地域の地質は全般に悪く、農地面積も小さいため、多くの農民はサービス業や建設業などの農業以外の仕事を持つ兼業農家である。その一方で、この丘陵地帯は近隣あるいは遠方から訪れる個人やウォーキングクラブなどにより、山歩きの場として使われ

---

(4) このような対話の場の機能不全の具体的な様相については、足立（2001）、平川（2005）、富田（2013）などを参照のこと。

ている。だが、アイルランドの中でもこの場所は、山歩きをめぐって特に深刻な農村アクセス問題を経験してきた。問題の発端は1990年代初頭に、あるアクセスルートが通る土地を所有する農民がそこをブロックしはじめたことであった。その後この農民は、2000年と2004年にそこを訪れたウォーカーに対し暴力事件を起こした。当時この事件はメディアによってスキャンダラスに報じられ、この農民自身は後にアクセスを許す立場に転向するものの、折からのウォーカーの増加と相まって、この丘陵地帯に住む他の何人かの農民がアクセスをブロックしている状態にある。

まず次節および次々節では、農民とウォーカーがこの丘陵地帯とこれまでどのように関わってきたのかについて記述する。そしてそれらを通して、両者の環境認識の比較をおこないたい(5)。なお、本稿が依拠するデータは、この地域において農民、ウォーカー、そして農村アクセス問題に関係するその他のアクターに対して実施したインタビューおよび彼らの活動への参与観察である(6)。

2　農民たちの環境認識

本稿で事例とする丘陵地帯の農家では、現在ではもっぱら羊もしくは羊と子牛を組み合わせた経営がなされている。だが、この地域でそのような農業形態が主流になったのはそれほど古いことではない。1960年代頃までは、多くの人々は数頭の乳牛および数十頭の羊を中心とした農業を営んでいた。だが、1970年代頃からミルクの値段が下がり、同時に多くの農民が近くの都市や町に働きに出るようになった。そのため、手間がかかって儲からない乳牛から、羊を中心とした経営形態へと変わっていった。他方、農外収入で得た現金や、アイルランドが1973年に加盟したEU（当時はEEC）からの補助金のおかげで、化学肥料や人工飼料を買って羊を数百頭まで増やせるようになった。またこの時期には農作業の機械化が進み、農道や土地境界フェンスの設置、農地の排水、灌木除去といった大がかりな土地改良や、牧草の植え替えや化学肥料散布がおこなえるようになった。その後1990年代からは環境保全農業制度が開始され、現在では多くの農民がこの制度に加入し重要な補助金となっている一方で、年々強まってきている規制に不満を抱いている農民も少なくなく、農民が自律してこの地域で暮らしを続けていけるような支援策を彼らは望んでいる。

先述のように、現在はこの丘陵地帯のほとんどが羊の放牧地である。高地を含む土地利

(5) ただし、アクセスそのものに対する両者の認識については、北島（2013）などの別稿で詳しく論じているため本稿では深く立ち入らない。

(6) データの収集は、2009年4月～2010年11月、2011年8月、2013年12月、2014年8月になされた。

用の典型としては、まず春に子羊が生まれると、親の雌羊と共に丘陵の高地部分に上げ、自由に草をはませる。そしてその間に、低地部分で牧草を生長させ、冬場のための飼料（かつては干し草であったが、今ではほとんどがサイレージ）を作る。ただし、夏には毛刈りや投薬・消毒などのため、羊を高地から下ろしてくる機会も数回ある。その後、秋口になると高地にいる子羊の大半を下ろし、市場で売却する。そして、残した雌羊に種付けをおこなって妊娠させた後、遅くとも翌年２月頃にはそれらをすべて高地から下ろし、餌をやりながら低地で出産の面倒をみる、というサイクルになっている。

この羊を集めて高地と低地を行き来したり、場所を移動させたりといった作業は、現在ではある程度の高度まではクオッドバイクに乗っておこなえるが、それより高地では今でも自力で歩き回らねばならない。丘陵の高地部分は複数の農民がシェアを持つ共有地になっていることが多いため、その場合は羊を集める際にシェアホルダーの農民が何人か集まって協力することもある[7]。この高地部分へは、個々が所有する低地部分の農地から直接アクセスできる場合もあるし、そうでない箇所には共有の農道が存在している。

また、丘陵の低地部分や丘陵から離れたところにある農地は、先述のように機械化に伴って様々な土地改良や施肥がなされてきたが、高地については機械を入れることができず、また私有でなく共有である場合が多いことも相まって、現在まで土地改良などはほぼなされていない。特に共有地と共有地の間には土地境界フェンスすら設置されていないことがほとんどのため、高地にいる羊は広範囲を歩き回って草をはむことも多い[8]。しかし、特に年配の農民たちは高地についての広い知識を有しており、そこで自分の家の羊を探し、追った長年の経験に基づいて、自分の庭のように歩き回ることができる。彼らが高地へ行くのは基本的には視界が良好な日であるが、途中で霧が出ても見知った周りの地理的特徴から自分の位置を判断して迷うことはないし、激しい雨が降ってもしばらく岩陰などで過ごしてから再び作業を開始する。

そして、彼らは高地や低地の様々な地理的特徴に、地図にも記載されていない地元名をつけている。その多くは、代々伝えられてきたアイルランド語の地名であり、その意味や綴りをもはや彼ら自身も判っていないことも少なくない[9]。だが、彼らは日常会話の中

---

(7) ただ、それを除くとシェアホルダーの間に協働はあまり見られない。また、共有地はその近隣の農民によって所有されていることが多いが、シェアは基本的に売買が可能なため、遠くに住む農民がシェアを持っているということもある。

(8) このため、シェアを持たない共有地で自分の羊が草をはむことも起こりうる。そのような事態が頻繁に起こる場合には、トラブルを避けるために農民はしばしばその共有地のシェアを購入する。

(9) イギリス植民地時代における英語の普及のため、現在ではアイルランド語話者は、アイルランドのごく一部の地域にしか存在していない。

で「昨日お前の所の羊を Tiebaun で見たぞ」というかたちで高地の羊を探す手がかりを教え合ったり、あるいは高地で協働して羊を集める際に携帯電話を使って「今、Blue Rock にいるからこっちへ来てくれないか」というかたちで連絡を取り合ったりするなど、それらの地元名を様々な農作業に役立てている。そのためこのような地名やそれが示す場所は、土地改良などをおこなった低地はもちろんのこと、高地のものであっても農作業の記憶としばしば結びついている。例えば、K さん（50 代・男性）はニューカーという名の岩場について言及する際、同席していた親戚の少年に「ほら、お前と一緒に足を怪我した子羊を助けに行っただろう」と声をかけている。あるいは、そのような固有名がつけられていなくとも、農民たちは様々な地理的特徴を「この穴には羊がよく落ちるんだ」とか「あそこの岩には以前に雷が落ちたことがある」といったように自分が経験した出来事と結びつけて認識している。

他方、農地はそのような仕事の場であると同時に、レクリエーションとまで言わなくとも一種のリフレッシュの場としても認識される。例えば、F さん（50 代・男性）はしばしば夕刻に、羊を高地にあげる途上の Stairs と呼ばれる石段状の部分に腰をかけ、眼下に広がる近隣の都市の夜景を眺めるのを楽しんでおり、それを「とても美しい光景だ」と評する。また、多くの農民たちは、農業という仕事の魅力のひとつとして、「屋外で働けて気持ちが良いこと」をしばしばあげる。

加えて、農地は人々や環境の移り変わりとも結びつきながら捉えられる。例えば、高地共有地のある箇所は農民たちから Pat Brian's Meadow と呼ばれており、かつて Pat Brian なる人物がそこで牧草を刈っていたことを伝えている。だが、現在ではそのような利用はおこなわれず、羊が草をはみに集まってくる場所となっており、農民たちもそのような場所として認識している。あるいは、Bothóg と呼ばれる場所には、かつて F さんの祖父が住んでおり、その住居の跡が今も残されている。そこは高地の共有地なのだが、19 世紀に F さんの祖父が兄弟げんかをして低地に住めなくなったため、1908 年に和解するまでそこに家や畑を作って何年も暮らす羽目になったのだという。F さんやその父親は、その後に低地で生まれたためそこでの暮らしを知らないが、高地は低地と比べて気温が低く風雨にもさらされ、さらに狭い住居の中で大家族と家畜が住まねばならなかったため、さぞ厳しい生活だったろうと彼は語る。だが、今ではこの場所の近辺は次第にシダなどに侵食され、放牧すら難しくなってきている。

また、農民たちの環境に対する認識はある種の領域性を持っている[10]。すなわち、私

[10] これはもちろん、農民たちがそこから抜け出せない存在であることは意味しない。

有地の場合は常にその周囲は境界フェンスで囲われ、その中で様々な農作業がおこなわれるし、隣地との境界フェンスがないような高地共有地の場合には、羊が主に歩き回る領域が彼らにとってもっとも馴染み深く、地理的特徴やそこに付けられた地名などをもっとも把握している範囲である。よって、高地で羊が行かないような場所や、自身が立ち入ることの少ない他人の私有地などに関しては、そこにつけられている地名などをあまり詳しく把握してはいない。すなわち、主に自分の脚（そして羊の脚）の動きに沿ったかたちで、環境についての認識が形づくられている。よって、彼らが新たに農地を購入したり借りたりした場合には、そこを日常的に歩き回ることを通してその地勢を把握していく[11]。

しかし、兼業化の進展や徒歩での作業の重労働性から、高地を利用する農民の数やその利用頻度は年々減少してきており、省力的に低地に重点を置いた放牧をおこなう農民が若い世代で増えてきている。そのため、彼らは年長の世代と比べて、高地の地理的特徴や地名に明るくないという。例えばRさん（60代・男性）は、かつては誰もが毎日のように高地に行って羊の様子などをチェックしていたため、共有地などでは必ず近所に住む誰かと顔を合わせたものだが、今は高地では独りでいることがほとんどで、山歩きに来るウォーカーに会うことの方が多いくらいかもしれないと語る。それでは、そのウォーカーたちはいかにこの丘陵地帯と関わってきたのかを次節で見てみよう。

3　ウォーカーたちの環境認識

先述のようにこの丘陵地帯はウォーカーの山歩きの場であり、古くは1939年出版の登山ガイドブックにもこの丘陵地帯の山々が紹介されている。ただ、この丘陵地帯の周辺地域においては、山歩きは近年までポピュラーなレクリエーションではなかった。この地域で初めて登山クラブが設立されたのは1972年、地域最大の都市Aにおいてであるが、ベテランウォーカーのEさん（40代・男性）によれば、1980年代後半でもこの地域で山歩きをする人は少数にとどまっており、当時彼が雨の降る風の強い日曜に山を歩いて過ごすと人々に伝えたところ、「お前は頭がおかしい」とからかわれたという。だが、そのような状況はアイルランドが急激な経済成長を遂げる1990年代に入ると変化し、ここ20年ほどで山歩きを含めたウォーキング活動は地域の一般的な余暇となった。現在この丘陵地帯の周辺地域には、山歩きを含むウォーキング活動をおこなっているクラブが複数存在して

[11] ただ、それが居住集落付近のすでに知った場所にあるのでなければ、その土地の様々な地理的特徴につけられてきた名前までが新たな所有者に引き継がれることはあまりない。

いるが、本節では上記のもっとも古い登山クラブの経験を見てみよう。

このクラブは創設以来、7月と8月を除く毎週日曜にこの丘陵地帯での山歩きを中心としたウォーキング活動を行っている。彼らのウォークは難易度に従ってA・B・Cの3つに分けられており、地形的・体力的にもっとも易しいCウォークは月に必ず一回開催され、クラブに新たに加入したい人々がやって来る日となっている。Cウォークには目的地と「リーダー」と呼ばれる先導者があり、他の人々は終始その人物に従って歩くのみであるが、AウォークやBウォークでは出発地と終着地のみが決められており、その間でどのようなルートをとるかは、ウォークの開始前や途中において、その日参加したメンバー数人が地図を前に話し合って即興的に決めることも少なくない。そのため、基本的にB以上のウォークに参加するメンバーは、地図やコンパスといったナビゲーション技術を使えることが期待されている。クラブはそのための講習会も毎年開いており、そのような技術を習得して初めて一人前のウォーカーと見なされる[12]。クラブはよほどのことがない限りいかなる天候であってもカレンダーで予定されたウォークを決行するため、雨や霧で視界が悪くなっている日などは、ウォークの折々でそのようなナビゲーション技術を使用しながら進路をとっていくことになる。

また、1990年代初頭までは、クラブの山歩きのあり方は現在とはかなり違っていた。それはより「スポーツ」に近いもので、ほとんど走るようにして高地を駆け上ったり降りたりしながら、誰か一番かを競ったりしていた。そのため、参加者は周りの景色や自然を楽しむというよりは、足元ばかり見るような歩き方をしていたという。また当時は装備も不十分でずぶ濡れになって帰宅することも多かったが、彼らはその冒険的な雰囲気や仲間との社交を楽しんだ。とりわけ1995年から2003年までクラブは、A Challenge（仮称）という名の長距離ウォークのイベントを企画しており、他の地域のウォーカーをこの丘陵地帯に呼んで、「自分たちのエリア」を体験させることに誇りを抱いていた。このように、ウォーカーの環境認識の中にも、その脚の動きに基づいた緩やかな領域的イメージが存在している。

だが、1990年代に入るとメンバーの数は急増し、それと同時にウォークの質もよりゆっくりしたペースのリラックスしたものとなり、人々は周りの動植物に注意を払ったり、時々立ち止まって高地からの眺めを楽しんだり、写真を撮ったりするようになった。また、今も昔もウォーカーにとってこの丘陵地帯は、健康維持や社交の場であるとともに、しばし

---

[12] ただ、実際にはBウォークなどは、ルートを決めた数人に残りの人々が後ろからついていくといった事態もしばしば見られる。

ば神秘的な感覚すらもたらす、文字通り「レクリエーション」の場でもある。そしてそのような経験は、時に自分の思い入れのある特定の場所と結びつけられる。例えば、先述のEさんは「Benに毎日行っても一日たりとて同じ日はないんだ。Benの頂上ではどの教会よりも神の近くにいると感じる。あそこには自分にとって特別な何かがある」と語る。

他方で、ウォーカーは地名の多くを政府発行の地図から学んでいるため、時にひとつひとつの岩や草地にまで名前をつけている農民と比べた場合に、彼らの地名に関する語彙の数は圧倒的に少ない。ただ、地図から学ぶ公式の地名に加えて、ウォーカーは自分たち自身で考案した地名を様々な場所につけることもある。それらは主にコミュニケーションの便宜を図るためで、The CaveやThe Damといった単純なものが多いが、時には特定の出来事に基づいた名付けがなされることもある。例えば、先述のA Challengeでは要所ごとにチェックポイントが設けられており、そこにはしばしば決まったクラブメンバーが担当者として待機していた。そして、高地のとある谷にはJoさんという人物がいつも待機していたため、その谷はメンバーの間でJo's Gullyと呼ばれるようになった。あるいは、地名に反映されなくとも、特定の場所と特定の経験が結びつけられてイメージされることもある。例えば、普段メンバーに「438」という標高名で呼ばれている場所は、A Challengeの際Michaelさんという人物がいつも待機していた。そのため、Lさん（40代･男性）は、誰かが「438」と言うたびにMichaelさんの姿を思い浮かべると語り、彼はそれを「あの場所にはなんだか『Michaelがあるんだ』」という言葉で表現する。

また、これらの地名はそれにまつわる出来事を直接経験していないメンバーへも伝えられていく。例えば、あるアクセスルートの近くには黄色いスクールバスが長い間停められていたため、このルートの場所はYellow Busと呼ばれるようになった。だが現在ではそのバスはもうそこに停められていないため､新しくクラブに入ったメンバーはしばしば「どうしてここがYellow Busなの？」と古参のメンバーに尋ね、その由来を知ることになる。そして、その後は新メンバーもこの場所をYellow Busと呼び、かつてのバスの存在とその消失という歴史のうえに、自身のそこでの経験を新たに付け加えていく。

さらに、ウォーカーは高地の共有地などでは所与の自然環境に手を加えることもある。例えば、ウォーカーがSlievemoreと呼ぶ高地の頂上には、有志のクラブメンバーによって建てられた十字架が存在する。これは元々、「大陸ではどの山の頂上にも十字架が建っているのだから自分たちの山にもそれを建てよう」という酒の席の会話が発端になってなされたものだという。あるいは、A Challengeのために、クラブは高地のいくつかの場所にケルンを設置しており、それらは現在でも残されている。この十字架やケルンは高地の共有地上にあり、その土地はもちろんシェアホルダーの農民たちによって所有されている

が、特に害もないからとこれらの建造物はこれまでのところ農民から容認されている。

だが、ウォーカーと農民の環境認識の間に齟齬が生じることがないわけではない。例えば、山歩きにおいてウォーカーは、共有農道か、私道か、私有の農地上の道なき道のアクセスルート[13]で低地から高地へと上がっていき、高地部分に達した後は、眺望やナビゲーションの関係から、主に高地の頂から頂へと進みつつ歩き回るという移動形式を、この丘陵地帯の様々な場所においておこなっている。だが、そのようなウォーカーの動きは、必ずしも農地の境界に沿っているわけではない。結果として、ウォーカーの取るルートは折に触れて農地の境界フェンスに行く手を遮られ、彼らはそれをまたいで先へ進んでいくことになる。通常フェンスは大人の股くらいの高さで最上部に有刺鉄線がついており、ウォーカーの穿くズボンにはしばしばフェンスをまたぐ際に有刺鉄線で引っかけた破れがある。そのため、フェンスは多くのウォーカーからは障害物として捉えられており、彼らはそれを設置した農民を非難することはしないが、さらなる設置を促進するような補助金には不快感を示す。他方で農民にとっては、フェンスは農地の境界を示すと共に、家畜が散らばるのを防ぐため設置したインフラでもある。そのため、多数のウォーカーにまたがれることによってフェンスが破損してしまうことを心配する農民も少なくなく、彼らはしばしば「農民はフェンスをまたいだりしない」とウォーカーの行為を批判する[14]。

あるいは、ウォーカーたちによって特定の名前で呼ばれる場所には、農民たちによって用いられている別の地名がすでに存在していることがある。その場合、まったく同じ場所がまったく違った名前で両者から呼ばれることになる[15]。例えば、十字架のある先述の Slievemore は、農民からは Cloch Bui という名で呼ばれている。そして時には、ウォーカーによって使われる名前の方が、より広く流通していることもある。例えば、ウォーカーのみならず行政や一般の人々からも Eagle's Rock と呼ばれている風光明媚な岩場を、地元の農民は Timpaun と呼んでいる。その岩場のある土地を所有する T さん（60 代・男性）はやや批判的に、本当の Eagle's Rock は別の場所にあるのだが、よそから来た人がこの Timpaun を Eagle's Rock と勘違いし、そちらの名前の方が一般に広まってしまったと語る。

ただ、そもそも農民とウォーカーは「仕事」と「レクリエーション」というかたちで主要な丘陵地帯の利用目的が異なっており、また具体的な活動のあり方も違っているため、

---

(13) この丘陵地帯でウォーカーが使用するアクセスルートは、約 25 箇所存在する。

(14) もっとも、筆者は農民がフェンスをまたぐ場面を何度か見たことがある。よって彼らの言葉は、「またぐことがあったにしても、農民は適切な方法を知っている」という意味合いも含んでいると思われる。

(15) 竹川（2003）は、このような地名の差異を手がかりに、漁業者とダイバーの間の環境認識の差異を検討している。

こういったズレの発生はある意味で当然とも言える。他方で、上述のように農民の利用の中にもレクリエーション的要素が皆無ではないし、ウォーカーも楽しむだけでなく物理的に土地に改変も加えているなど、両者の働きかけは共に多面的である。そして何より、農民もウォーカーも自らや先達の様々な経験を投影しつつこの丘陵地帯を認識しており、彼らはそこを領域性のある「場所」として継続的に構築してきた。つまり、主要目的やその活動のあり方に違いはあるものの、環境との関わりの形式という点においては、両者は共通したものを持っている。そのため、対話を通して両者が互いの環境認識を擦り合わせ、さらにそこから福永が論じた〈応答と関係の場〉のような新たな位相の「場所」をこの丘陵地帯に構築していく余地は存在しているように思われる。実際、この丘陵地帯においては2003年から数年間にわたって、農民とウォーカーを含めた地域の利害関係者が集い、アクセス問題をめぐって話し合うフォーラムが設けられたことがあった。しかし、その試みは持続せず失敗してしまう。次節では、この事態について見ていく。

4　対話の場とその行き詰り

アイルランドにおいては2004年に、農村アクセス問題に関する全国的な利害関係団体間の対話のため、Comhairle na Tuaithe（CNT）という委員会が政府によって設立されたが、そこでの議論は現在に至るまで問題の包括的解決策を導き出せてはいない。これに加えて、地域レベルにおいても農民やウォーカーなどの利害関係者による正式な対話の場をつくる試みが、これまでいくつもなされてきた。とりわけ、CNTにも参加している1996年設立のIrish Uplands Forum（IUF）は、農村アクセス問題も含めた高地をめぐる様々な社会的・経済的・環境的な課題について、地域の利害関係者のパートナーシップを通じて解決していく試みを推進している。そのような地域レベルの対話の場のうち、もっとも確固たるものとして成立しているのは、首都ダブリン近郊の丘陵地帯Wicklowをめぐって1997年に設立されたWicklow Uplands Council（WUC）である（Van Rensburg et al. 2006）。だが、このWUCはパートナーシップの成功事例として引き合いに出されることが多いものの、農村アクセス問題をめぐってはCNTと同様に暗中模索を続けている。そして何より、アイルランドにおいてはこのWUCを除けば、農村アクセス問題に関して地域レベルで農民とウォーカーの対話の場を作ろうとする試みは、そのほとんどが有効に継続あるいは機能してこなかった。本稿が事例とする丘陵地帯で作られたフォーラムも、そのように不首尾に終わった対話の場のひとつである。

このフォーラムは、この丘陵地帯で激化していく農村アクセス問題を背景として、2003

年5月に作られた。フォーラム設立の直接のきっかけは、2002年11月にIUFが全国の様々な利害関係者を集めて都市Aで開催した、地域レベルでの高地パートナーシップ設立を推進する会議であった。この会議に刺激を受けた数人の人々が、この丘陵地帯にもWUCと同じようなものを作ろうと、新聞広告等でパブリック・ミーティングを呼び掛けた。この動きの中心を担ったのが、この丘陵地帯が位置する2つのカウンティのうちのひとつ、B県の社会振興局で小農問題を担当していたSさん（40代・男性）であった。彼は、全国レベルの農民団体Irish Farmers Association（IFA）で当時農村アクセス問題に関するフロントマンをしていた、この丘陵地帯に住む農民Cさん（50代・男性）と協力しつつ、特に地域の農民の利益のため、利害関係者の対話を通じた農村アクセス問題の解決を図ろうとした。彼は、このフォーラムが目指したものについて以下のように話す。

> フォーラムでは、まず互いを理解してそこからフォーマルな状況を作りだそうとした。（…）アクセス問題はお金では解決できない、人々の関係性の問題だ。農民はとても怒りやフラストレーションを持っているのに、その解決先がない。

初回のパブリック・ミーティングには、WUCからのゲストスピーカーも含めて多数の参加者があったが、それ以後の話し合いにも継続して来たり、後から参加したりしてフォーラムに残った人々はそれほど多くなかった。フォーラムの主なメンバーは、SさんとCさんのほか、この丘陵地帯を含むもうひとつのカウンティであるA県の社会振興局の担当者、有志の農民3人、先述の登山クラブの代表者、地域の町Bの観光組合の代表者[16]、地域の町Cでホステルを経営する人物[17]、地元の山岳レスキューの代表者の計10名であった。

だが、その後のフォーラムの活動は、ほとんどと言っていいほど成果を生まなかった。アイルランドの農村アクセス問題において特に問題とされてきたのは、①農民の財産への被害、②管理者責任、③商業利用など[18]であるが、そのどれもが地域の利害関係者の話し合いだけで解決できる事柄ではなかったのである。というのも、これらは不特定多数のレクリエーション利用者による多地点での農地へのアクセスという、対話の場には参与してこない外部アクターに関わる問題であったからだ。当時のフォーラムのメンバーはみな、「フォーラムは友好的な雰囲気だった」と語っており、メンバーの間ではある程度の信頼

---

[16] この観光組合は、当時この丘陵地帯で年に2回の山歩きのフェスティバルを開催していた。

[17] この人物は、2000年に起こった先述の暴力事件の被害者でもあった。なお、この事件を起こした農民は、初回のパブリック・ミーティングには参加したものの、自分自身でキャンペーンをすることを望み、その後はフォーラムには参加しなかった。

[18] これらの問題の詳細については、北島（2013）を参照のこと。

感が醸成されていたことがうかがえる。だが、そのような直接的な関係性に参入してこない不特定多数者を、2つの県にまたがる広大な丘陵地帯において各利害関係者が納得できるレベルでコントロールしていこうとするのであれば、そのためにはかなりの資源が必要となる。だが、このフォーラムはボランタリーなものであったため、人的・財政的な資源をほとんど持っていなかった。そのため、フォーラムは折に触れて国や県などに活動の援助を求めた。しかし、フォーラムが発足してすぐの2004年1月に、先述の農民が暴力事件によって収監され、それは大きなスキャンダルとして各方面からの激しいリアクションを呼びよせた。その結果、この地域の農村アクセス問題はあまりにセンシティブなものとなってしまい、各行政組織は表立ってこれに手をつけることに尻込みしたため、結局フォーラムは公的な機関からの支援を受けることはできなかった[19]。さらに、フォーラムは上記のような諸問題をウォーカーと農民の中継点となる専門スタッフを国にあてがってもらうことによって解決しようと奔走したため、農民とウォーカーがお互いの環境認識のありようについて理解を深め、それを擦り合わせていくような取り組みは、ほとんどなされなかった。

また、彼らの議論は当時立て続けに起こった出来事にも大きく揺さぶられた。先述の暴力事件に加えて、この丘陵地帯からやや離れた地域の私有地において、そこで怪我をしたレクリエーション利用者がその地主を訴えるという事件が起こったり[20]、フォーラムの活動について誤解した農民から激しい苦情を受け、その対応に追われたりした。また、フォーラムのメンバーも継続的に活動に関わることができなかった。2004年末にBの観光組合がファンド不足で解散に陥り、またホステル経営者もやがて他出することになり、さらにA県の社会振興局の担当者は異動で頻繁に替わった。このような事情により、フォーラムでは互いの環境認識を擦り合わせる以前に、議論の継続性を確保することも難しかった。

それでも、2005年末からフォーラムは、SさんとCさんを中心にひとつのプロジェクトを進めようとした。それは、この丘陵地帯の共有地のひとつに駐車場や踏み越し段などを設置して農民とウォーカー双方の便宜を図り、それによって、利害関係者が協働することで何が達成できるかについての具体的な成果をまず示そうというものであった。当時この共有地は13人のシェアホルダーによって所有されていたため、SさんとCさんはシェ

---

[19] なお、WUCは対照的に様々な組織からのファンドを得て、専属のスタッフを雇用しながらその活動を続けている。

[20] この地主は農民ではなく、かつ裁判では最終的に地主側が勝利したが、高裁でいったんレクリエーション利用者側が勝つなどしたため、この丘陵地帯の農民たちを動揺させた。

アホルダー全員にコンタクトしてプロジェクトについての合意を取り、プロジェクト実施のためのファンドを地域の観光イニシアチブに申請した。

このプロジェクトはある意味で、フォーラムを中心とした人々が協働して、この共有地から新たな位相の「場所」を構築していく可能性を持った動きだったと言えるかもしれない。だが、その過程で思わぬことが起こってしまう。彼らがこのプロジェクトを進めていた当時、国レベルの CNT では、全国の利害関係者が討議して National Countryside Recreation Strategy という、アクセスも含めた農村レクリエーションをめぐる諸課題についてのベースライン文書の作成に取り掛かっていた。その過程で CNT メンバーであった農民団体 IFA は、農民が農村アクセスをめぐって支払いを得られるシステムを国レベルで構築する必要性を強く主張し、このベースライン文書にそれについての言及を盛り込むことを求めた。だが、2006 年 9 月に最終的に発行された文書にはそのような言及は盛り込まれず、その結果に反発した IFA は、CNT への参加を一時見送るという抗議手段に出た。このような状況を受けて、いったん上記のプロジェクトの実施に合意していたシェアホルダーの農民たちは、IFA のスタンスへの連帯を示すために、その合意を取り下げてしまった。そして結局、このプロジェクトはそのまま流れてしまい、フォーラムは目指した具体的成果を実現することはできなかった。この時点に至って、約 3 年半にわたって活動を続けてもほとんど成果をあげられないフォーラムに、その中心を担っていた S さんらは諦めを抱き始め、その後「政府の動きを待つ」というスタンスでフォーラムは自然消滅していくこととなった [21]。

以上のように、この丘陵地帯において地域レベルで試みられた対話の場は、不特定多数の利用者や全国団体の方針といった、そこに参与してこない外部アクターが有する影響力のために、農民とウォーカーが互いの環境認識を擦り合わせるようなものへと発展していくことはなかったのである。その後、この丘陵地帯ではそれぞれの県当局が、単独かつ部分的ながら、アクセスのためのインフラ整備に乗り出し、かつてほどの対立的な雰囲気はなくなってきているが、今なお農民とウォーカーの間の社会的距離は縮まってはいない。ただ、そのようなわだかまりを抱えた状況においても、例外的な事態が存在する。それは高地における山岳レスキューの救助活動である。次節では、この事態とそれがもたらすものについて見ていこう。

---

[21] その後、2007 年に政府は Walks Scheme という農村アクセスに関する支払い制度と Rural Recreation Officer という各地域でその実施や交渉等を担当する役職を創設した。それはフォーラムがその活動中に切望していたシステムであったが、皮肉にもこの丘陵地帯はその対象地域にもならなかった。

5　山岳レスキューの救助活動とその準備実践

1960年代まで、アイルランドの丘陵地における遭難者は、地元の登山クラブや農民の手によって救助されていた。だが、1965年に南北アイルランドをカバーする山岳レスキュー組織が設立され、その後は各地域でこの全国組織傘下の山岳レスキューが結成されていった。現在では、南北アイルランドで計12の山岳レスキューがそれぞれの地域をカバーしつつ活動している。彼らは警察や海上警備隊などと協力して、主に高地での遭難者の救助をおこなっており、その活動は完全なボランティアである。

そして、本稿が事例とする丘陵地帯も、この地域一円をカバーする地元山岳レスキューの活動対象となっている。現在この山岳レスキューは、山歩きを中心とするアウトドア活動をたしなんできた約20人のメンバーで構成されている。メンバーは都市Aの住民が多いが、周辺地域や隣県に居住するメンバーもいる。メンバーのうちコアに活動しているのは12人程度で、彼らは日ごろから様々な訓練をおこないつつ、警察からの救助要請があれば休日返上で現場に駆け付ける。この山岳レスキューが結成されたのは1980年頃とされており、当初それは先述の登山クラブとほぼ一体であった。そのため、山岳レスキューのメンバーは同時にこの登山クラブのメンバーでもあるという時代が長く続いたが、近年では両者は別々の組織として活動しており、両方に属しているのは4人程度である。

彼らの救助活動は、この丘陵地帯を含めたA県とB県がその中心であるが、しばしば隣接する地域の山岳レスキューの応援にも出かける。また、実際の遭難者の救助の他にも、未然の兆候への対処や様々なアウトドアイベントの手助け、そして農民の所有する羊や牧羊犬が高地で迷ったり立ち往生したりした場合にも出動をおこなう。彼らの年間の出動回数は、山歩きがより盛んな他の地域の山岳レスキューと比べると決して多いものではないが、2006年と2007年が各11件、2008年が16件、2009年が13件などとなっている。

山岳レスキューが救助活動をおこなう際には、もちろん農民の私有地や共有地を横切ることになる。しかし、これは警察を同伴した活動であるため、基本的に農民は拒否することができない。だが、そのような事態に不満を抱く農民もいる一方、少なくない数の農民が救助活動の際には自ら積極的に助力を申し出る。例えば、先述の暴力事件を起こした農民の住む集落の背後にある高地で、2008年にポーランド人旅行者が遭難・死亡する事故が起きた。当時この農民はすでにアクセスを許容する立場に転向していたものの、集落内ではいまだウォーカーのアクセスへの不信感も残っている時期であった。だが、この救助活動に対しては多くの地元農民からの協力があった。当時の様子について、山岳レスキュー

のメンバーであるGさん（40代・女性）[22]は以下のように回想する。

> 地元の人たちは農道にあるいくつものゲートを取り払ってくれ、私たちはそこを通って降りた。彼らは装備が不十分な検死官を車で現場に連れてくることもしてくれた。弟を山で失ったことのある農民などは、とても感情的になっていた。彼の弟は同じような事故で死んだから。

Gさんによれば、このほかにもサンドイッチを持ってきてくれたり、医者や司祭を呼んできてくれたりする人々もいたという。つまり、普段はウォーカーに対して良い感情を抱いていない人々が少なからずいる地域でも、山岳レスキューによる遭難者の救助活動時には、例外的な「非常事態」としてそのようなわだかまりはいったん棚上げされ、多くの人々が遭難者や山岳レスキューのメンバーに対して助力をおこなうのである。これは一種の非常時規範であり、R. Solnitや多くの災害学者が指摘する「災害ユートピア」がそこには立ち現われていると言える（Solnit 2009=2010）。

他方で、通常この「災害ユートピア」は非常時の短期間にのみ発生するものであり、その後はやがて日常の規範が戻って来るとされている。だが、山岳レスキューの活動は、救助現場のみで完結しているものではない。すなわち、彼らは日ごろから訓練や知識の蓄積を通して地元の高地に精通していなければ、現場において迅速な救助活動を実施することができない。そのため、彼らは2週間に一度、火曜の夜に救助活動の訓練をおこなっており、そのうちの半分はこの丘陵地帯での実地訓練となっている。また、8週間に一度は、日曜の丸一日をかけての実地訓練もおこなっている。

そして、これらの実地訓練がおこなわれる高地に関しては、山岳レスキューのメンバーは、そこへのアクセスルートを所有する農民の幾人かとは、顔見知りの関係になっている。また、過去に自分の羊や牧羊犬を救助してもらったり、もしくは隣人がそのような助けを得たことを聞いたりしたために、ウォーカーのアクセスには少なからず批判的であっても、山岳レスキューや彼らが訓練をおこなうことについては好意的に語る農民もいる。あるいは、山岳レスキューと接点がなかったり、不満を抱いていたりしたとしても、言わば救助活動の延長線状にあるものとして、彼らが訓練をおこなうことを容認する場合もある[23]。つまり、このようなアクセスは、山岳レスキューと農民との直接的なやり取りや、「救助」

---

[22] 彼女はまた、先述の登山クラブの古参メンバーで、経験を積んだウォーカーでもある。

[23] 先述の暴力事件を起こした農民ですら、ウォーカーのアクセスに強硬に反対していた時期でも、山岳レスキューの訓練に対して許可を出したという。

という非常事態をめぐる意味の共有によって達成されている。

さらに、山岳レスキューのメンバーの一部、特に先述のGさんは、上記のような救助活動の準備実践の一環として、農民たちの環境認識に近づくような試みもしている。というのも、山岳レスキューは救助活動時において、遭難者に関する手がかりを時に農民たちから得ることもあるからだ。通常ウォーカーそして山岳レスキューは、Grid Referenceと呼ばれる方法を用いて、高地上の地点を特定している。これは、政府発行の地図上に引かれている、番号を付記された縦軸と横軸の組み合わせを用いて、ある地点をあらわす方法であり、彼らがナビゲーションをおこなう際には、主にこの方法を用いて互いにコミュニケーションをとっている。だが、もちろん農民たちは高地を歩くのに地図などは使わないし、Grid Referenceについても知らない。そのためGさんは、農民たちが高地上の地点について話すやり方や、高地の認識方法を知ることで、そこから遭難者の位置などについての手がかりを得ようとしている。これについて彼女は、「農民自身が怪我をした人と出会うこともある。でも、彼らはそこがどこか知っていても、Grid Referenceについては判っていない。彼らは『去年黒い羊が死んだMickey SallyのPostのところだ』というような言い方をするから」と話す。

そして、このような試みの一部として、Gさんは現地の農民が使う地名についても記録しているという。というのも、先述のようにそれはウォーカーの使う地名とは異なったりずれたりしているからだ。例えば、先述したStairsについて、彼女は地元の農民がその名前を言った時にそれがどこのことだか分らなかったという。というのも、その場所はウォーカーの間ではDutchman's Pathと呼ばれていたからだ[24]。このような事態に気付いたGさんは、羊の救助をおこなう際などに地元の農民と雑談したり、あるいは古い地図を参照したりして[25]、農民によって使われている地元名やその由来を把握しようとしている。その学びについて、彼女は以下のように語る。

> Keelogyboyで私たちがPadraig's Gullyと呼ぶところは、農民はSheep Gullyと呼んでいる。また、私たちがSramoreと呼ぶ山があるが、実はそれはタウンランド[26]の名前で、実際の山の名前はCathair Morだ。そしてその隣の山は、私たちはそこでソーセージを食べたのでソーセージ・マウンテンと呼んでいるが、実際はCathair Beagという

---

[24] この名前は、かつて山岳レスキューがそこでオランダ人の観光客を助けたことに由来する。Gさんによれば、この名前は今では他地域から山歩きに来る人々も使うことがあるという。

[25] Gさんは、この地域についての本も出版している地元史研究家でもある。

[26] アイルランドにおいて用いられている、地域を地理的に区分する最小の単位。

名だ。また、農民がSramoreと言えば、それは私たちがBuck of Tucker's Gullyと呼ぶようなところだ。私たちは救助活動をおこなう際にはそういうことに気をつけなければいけない。

このようなかたちで、主にGさんを中心とした山岳レスキューは、農民による環境認識のありようについても学び、それを自らの環境認識と比較しながら、そこに取り入れていくことによって、迅速な救助活動に役立てようとしている。そしてこのような試みは、上述のような農民との直接的なやり取りに加えて、古地図の精査という学問的実践を通してなされている。

6 結論

本稿で検討した丘陵地帯を利用する農民とウォーカーは、その主要目的や活動のあり方は互いに異なっているものの、環境との関わりの形式という点においては共通したものを持っている。そのため、対話を通じて彼らの環境認識が擦り合わされ、そこから新たな位相の「場所」が生みだされるという可能性自体は存在していると思われる。しかしながら、公衆による農地の多地点的なレクリエーション利用という、農村アクセス問題が全体としてはらんでいる特質は、そのような直接的な対話の場には参与してこない多数の外部アクターを、水平レベルでも垂直レベルでも生じさせることになる。そして、不特定多数者の利用や農民団体の全国レベルでの方針といった、そのような外部アクターの影響力によって、本稿の丘陵地帯で試みられた対話の場は行き詰まりを迎えてしまったのである。これは、福永の論考が扱った状況とは異なり、農村アクセス問題においては、地域の関係者の対話にもとづくアプローチだけでは問題の解決が困難であることを示している。

他方で、そのような状況下でも多くの農民は、ウォーカーを中心とする山岳レスキューによる救助活動や実地訓練については、多かれ少なかれ主体的に受け入れている。これは、「救助」という限定された意味、あるいは山岳レスキューという限定された主体の枠内で達成されている事態であるため、それ自体はあまり広がりを持つ現象ではないかもしれない。しかし、そのような山岳レスキューによる救助準備実践は、ウォーカーが農民の環境認識について学ぶという事態をもたらしており、農村アクセス問題をめぐる対話の場とは別のところで両者の環境認識が出会う契機を生んでいる。

もちろん、上述の実践はウォーカーから農民に向けた一方向的なものにすぎない。しかし、ここで重要であるのは、そのように自身の便宜を図ろうとする実践が、他者の環境認

識へとつながる契機を生みだしうるということである。つまり、同じように自身の便宜を図ろうとする実践の中から、農民がウォーカーの環境認識へとつながっていく可能性も皆無ではない。そして、この丘陵地帯においてもその萌芽は存在している。例えば、この地域に住むウォーカーのBさん（50代・男性）は、現在は農業をおこなっていないものの農家の出身であり、子供の頃は高地で羊を追う生活を送っていた。その後、エクササイズとして山歩きをすることにしたBさんは、登山ガイドとしての訓練を受け、地図やコンパスの使い方も習得した。このため彼は、地元の馴染み深い丘陵に関しては子供の頃からの直観のみで歩き、その他の丘陵ではナビゲーション技術を補完的に用いるといった歩き方が可能である。このBさんの事例は少なくとも、状況がかなえば農民もウォーカーの環境認識へと接近しうるということを示すものと言えよう[27]。

ただし、注意しておかねばならないのは、このような契機は農民とウォーカーの間の対話を志向するようなものではないということだ。つまりそれは、福永の描いたような、生活の共有を通して人々が「場所」を共に作りあげていくという「応答と関係」の営みではない。本稿で描いた山岳レスキューの場合には、迅速な遭難者の救助を目指した実践の中から、この契機は生まれている。よって、例えば先述のGさんは多くの農民と顔見知りになろうとしているわけでは決してないし、また農民がアクセスをブロックすることについては、「彼らはもっと長期的な視野を持って、観光経営などに乗り出すべきなのに…」としばしば批判的に語る。このような点については、上述のBさんの場合でも同様である。つまり、これらのケースにおいて農民とウォーカーの環境認識をつなげている回路は、対話の場において作られるそれとは異なっている。それはあくまで、自身の便宜を図ろうとする、言わば自己完結した実践の内側から生じてくる、本質的に一方向的な他者への回路なのである。

参考文献

足立重和, 2001,「公共事業をめぐる対話のメカニズム――長良川河口堰問題を事例として」舩橋晴俊編『講座環境社会学第2巻　加害・被害と解決過程』有斐閣, 145-76.

荒山正彦・大城直樹・遠城明雄・渋谷鎮明・中島弘二・丹波弘一, 1998,『空間から場所へ――地理学的想像力の探求』古今書院 .

Corbin, A., 1995, *L'Avènement des Loisirs 1850-1960*, Paris: Aubier.（= 2000, 渡辺響子訳『レジャーの誕生』藤原書店 .）

Edensor, T., 2000, "Walking in the British Countryside: Reflexivity, Embodied Practices and Ways to

[27] もっとも、本稿の事例の丘陵地帯は、現在までのところ山歩きの観光地としては十分なマーケットが成立していないため、例えば農民が副収入のために登山ガイドになるといったことへのインセンティブは大きくない。

Escape," *Body & Society*, 6 (3-4): 81-106.
福永真弓, 2010,『多声性の環境倫理――サケが生まれ帰る流域の正統性のゆくえ』ハーベスト社.
Gooch, P., 2008, "Feet Following Hooves," T. Ingold and J. L. Vergunst eds., *Ways of Walking: Ethnography and Practice on Foot*, Hampshire: Ashgate, 67-80.
Gray, J., 1999, "Open Spaces and Dwelling Places: Being at Home on Hill Farms in the Scottish Borders," *American Ethnologist*, 26 (2): 440-60.
平川全機, 2005,「継続的な市民参加における公共性の担保――ホロヒラみどり会議・ホロヒラみどりづくりの会の 6 年」『環境社会学研究』11: 160-73.
堀川三郎, 2010,「場所と空間の社会学――都市空間の保存運動は何を意味するのか」『社会学評論』60（4）: 517-34.
Ingold, T., 2000, *The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*, London: Routledge.
――――, 2007, *Lines: A Brief History*, London: Routledge.（= 2014, 工藤晋訳『ラインズ――線の文化史』左右社.）
Jenkins, J. M. and E. Prin, 1998, "Rural Landholder Attitudes: The Case of Public Recreational Access," R. Butler, M. Hall and J. Jenkins eds., *Tourism and Recreation in Rural Areas*, Chichester: John Wiley & Sons, 179-96.
北島義和, 2013,「いかに農地は公衆に開かれうるか――アイルランドにおける農村アクセス問題をめぐって」『ソシオロジ』57（3）: 3-19.
Lee, J., 2007, "Experiencing Landscape: Orkney Hill Land and Farming," *Journal of Rural Studies*, 23: 88-100.
Lorimer, H. and K. Lund, 2003, "Performing Facts: Finding a Way over Scotland's Mountains," B. Szerszynski, W. Heim and C. Waterton eds., *Nature Performed: Environment, Culture and Performance*, London: Blackwells, 130-44.
McNaghten, P. and J. Urry, 2000, "Bodies of Nature: Introduction," *Body & Society*, 6 (3-4): 1-11.
Michael, M., 2000, "These Boots Are Made for Walking…: Mundane Technology, the Body and Human-Environment Relations," *Body & Society*, 6 (3-4): 107-26.
Olwig, K., 2002, *Landscape, Nature and the Body Politic: From Britain's Renaissance to America's New World*, Wisconsin: University of Wisconsin Press.
Relph, E. C., 1976, *Place and Placelessness*, London: Pion.（= 1991, 高野岳彦ほか訳『場所の現象学』筑摩書房.）
Solnit, R., 2009, *A Paradise Built in Hell: The Extraordinary Communities That Arise in Disaster*, New York: Viking.（= 2010, 高月園子訳『災害ユートピア――なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』亜紀書房.）
竹川大介, 2003,「実践知識を背景とした環境への権利――宮古島潜水漁業者と観光ダイバーの確執と自然観」『国立歴史民俗博物館研究報告』105: 89-122.
富田涼都, 2013,「なぜ順応的管理はうまくいかないのか――自然再生事業における順応的管理の『失敗』から考える」宮内泰介編『なぜ環境保全はうまくいかないのか――現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』新泉社, 30-47.
Tuan, Y., 1974, *Topophilia: A Study of Environmental Perception, Attitudes and Values*, New Jersey: Prentice-Hall, Englewood Cliffs.（= 1992, 小野有五・阿部一訳『トポフィリア――人間と環境』せりか書房.）
Urry, J., 2000, *Sociology beyond Societies: Mobilities for the Twenty-first Century*, London: Routledge.（= 2006, 吉原直樹監訳『社会を越える社会学――移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局.）
Van Rensburg, T., E. Doherty and C. Murray, 2006, *Governing Recreational Activities in Ireland: A Partnerships Approach to Sustainable Tourism*, Working Paper No.113, Department of Economics, National University of Ireland, Galway.
Vergunst, J., 2012, "Farming and the Nature of Landscape: Stasis and Movement in Regional Landscape Tradition," *Landscape Research*, 37 (2): 173-90.
――――, 2013, "Scottish Land Reform and the Idea of 'Outdoors'," *Ethnos*, 78 (1): 121-46.
Vergunst, J. and A. Árnason, 2012, "Introduction: Routing Landscape: Ethnographic Studies of Movement and Journeying," *Landscape Research*, 37 (2): 147-54.

吉原直樹, 2008,『モビリティと場所――21 世紀都市空間の転回』東京大学出版会.

（きたじま　よしかず・非常勤講師）

The Limits of Dialogue and Opportunities from Emergencies: Perceptions of the Environment by Farmers and Walkers in Ireland

Yoshikazu KITAJIMA

The countryside access issue is a conflict over farmlands between their legal owners (mainly farmers) and people using the lands for recreational purposes. This conflict is one between two different perceptions of the environment: work and recreation. This paper analyzes the perceptions of the environment of farmers and recreational walkers in one area in the Republic of Ireland, where there have been serious access problems, and explores how these two perceptions can be reconciled.

An inquiry into the practices of farmers and walkers in the area reveals they have built the same kind of relationships with the environment, though their activities themselves are different. Therefore, there is the possibility for them to reconcile their perceptions through dialogue. However, the countryside access issue often involves influences from actors outside of such dialogue, and dialogue by local stakeholders in the study area did not result in reconciliation because of such outside influences .

On the other hand, the local mountain rescue team easily gains access to the area for their operations because of its emergent nature. Moreover, some rescue members are learning the perceptions of the environment of local farmers, because they think such knowledge provides them useful clues for searching for missing people in the mountains. This practice creates an alternative opportunity for walkers to reconcile their perception of the environment with farmers, other than the opportunity created in dialogue. This fact shows there is a way of reconciling different perceptions of the environment through pursuing one's own interest.